



## ○400人の町で生まれた企業

→ 石見銀山の間歩

千葉望著『500人の町で生まれた世界企業 義肢装具メーカー「中村ブレイス」の仕事』(2009年)を参考にタイトルをつけてみました。今の人口は400人ほどです。

大田市大森町には、中村ブレイス株式会社の他に、ライフスタイルブランド群言堂(運営:株式会社石見銀山生活文化研究所)が本拠を置いています。“手しごと”による「まご

ころ」を顧客に届ける会社、町の活性化とCSR(企業の社会的責任)を強く意識した会社だと共通して感じています。世界遺産石見銀山を訪れる観光客のために会社が取り組んでおられる清掃活動からもそのことが窺えます。

中村ブレイスの創業者で現会長の中村俊郎氏、株式会社石見銀山生活文化研究所の創業者で社長の松場登美氏の講演を聴いたことがあります。今回、2年生の研修旅行で大森町に行くこともあり、印象に残ったことを紹介します。

中村氏は、働きながら苦学して短大の通信制課程を卒業。その後アメリカの義肢装具メーカーや病院で2年半の経験を積んだあと帰国し、Uターンでふるさと大森町に中村ブレイスを起業されたのが1974年、26歳の時。「ブレイス(brace)」は、装具という意味ですが、支える、補強するという意味もあります。講演では、整形外科と連携した仕事のため、3時間かけて鳥取大学医学部などがある米子に幾度となく行き営業をかけて仕事を請け負った話や島根県教育委員会委員長を務められた時も松江に何度も足を運んだ話をされました。拠点を大森に置いたからこそかかる時間と労力ですが、それでも過疎化が進む大森を盛り上げたいと拠点を移されなかったことが印象に残りました。特に印象に残ったのが、障がいがある子どもなどのためにアジアの各地を飛び回って義肢装具をつくられた話です。フィリピンでは現地の職人と協力して、竹細工の義足を開発し、日本で数十万円かかる義足を1万円もかからない値段で提供できるようにされたそうです。一時的に援助して終わりのような国際援助でなく、その後のSDGsにつながるものでした。その中で、人(社員)を育てることの大切さ。障がいがある方のための研究や工夫への努力を怠らないこと。だから患者・顧客にとことん寄り添う気持ちの大切さを学びました。慈善事業ではないので、利益も出さないといけません。そのために、シリコン樹脂製の足底板(シリコン)の開発を手がけ、特許申請、製造販売まで行きつく苦労話もされました。講演では、受講者全員に、ご自身の著書である『コンビニもない町の義肢メーカーに届く感謝の手紙 ～誰かのために働くということ～』が無料で配布されました。本のタイトルにあるように、講演でも感謝の手紙が紹介されました。地雷で片足を失ったアフガニスタンの少女のために義足をつくる話が描かれた2009年の映画「アイラブ・ピース」の撮影エピソードにも心が熱くなりました。

松場氏は、ご主人のUターンを機に大森町に来られた1981年に布小物の製造・販売を始められ、今では東京駅近くにショップを出されるほどに会社を育てられました。「群言堂」の反対は「一言堂」。一言堂には、人の意見を聞かず独断で行ったり、討論の場で多くの人の言い分を取り入れず自分の一存で決めたりするやり方という意味があります。

講演では、これまでの経験で学んだ、あるいは肝に銘じてきた様々な言葉を紹介されました。「失敗のない人生は失敗」、「一生の計は今日にあり」、「売り上げ目標より継続目標」、「経済力より文化力」、「竹は根っこで他の竹と手を握り合って、各自がまっすぐ立っている」、「都会は効率で勝負し経済を優先するからこそ、田舎は非効率で勝負」、「ありがとうの反対はあたりまえ」、「優柔不断とは、やさしくやわらかく接して断らないという意味」、「損か得かでなく、やるかどうか」、「知識には限界はあるが、感性には限界はない」、「消費でなく自己投資、自分を満足させるものを買うことが大事」、「伝統は革新の結果」・・・などを書き留めていました。「ものさしで測れないものが、美、豊かさ、幸せ」が特に印象的でした。

大森町には、石見銀山工房むうあの彫刻家吉田正純氏も住んでおられます。私が初任で大田高校に1年ほど勤務した時の美術の先生で、とてもよくしてもらいました。中村ブレイス、群言堂には当時の生徒が就職したので昔から知っていた会社でした。大森町にはなにかしらの縁を感じているところです。2年生には研修旅行で、観光も含め、ふるさと活性化に取り組み、全国や世界を舞台に活動し社会貢献している会社や町の思いや空気を大森町で感じてもらいたいです。

